

佳作

ひと夏かけた二曲

山口県 山口県立徳山商工高等学校二年 末永 早結美

私が最近感動したことは、コンクールでの演奏後の響きやまない拍手です。なぜ、こんなにも拍手が感動するのかわからないと、ひと夏をかけて仕上げた二曲だからです。私が吹奏楽コンクールを知ったのは、小学三年生の時でした。四つ年の離れた姉は吹奏楽部に入っており、毎日朝早く家を出ていき、空が暗くなるまでコンクールに向けて練習をしていたため、中々家に帰ってきませんでした。そんな姉の姿を見て、コンクールとは吹奏楽をやっている人にとってどのようなものだろうと思っていました。そして、人生初のコンクールに足を運んだ私は多くの刺激を受けました。ステージを見ると真剣な表情で演奏をしている姉とその仲間達、客席からは情熱のこもった演奏に対する温かい拍手と力強い「ブラボー」という声、演奏に対する賞の発表時の緊張感と、目標だった賞の時の喜びの声、それを皆で祝う会場の空気感、全てがドラマチックでかっこよく見えました。もちろん勝負事なので、望んでいた結果に届かず泣いてしまっている学校もありました。しかし、賞にかまわず素晴らし

で上達しますが、表現は中々そうもいきません。先生からの質問に対する意思表示や返事、曲に対する思いなど日頃の自分の生活態度が表現に繋がっていきます。そのため、奏者としてのスキルアップにプラスで、日々美しくいられるよう努力しました。そうして「自分に厳しく」をモットーに過ごしました。そのかにもあり二年生では中国大会で金賞を取ることができました。しかし、顧問の先生は金賞に対して、「賞だけにこだわるだけでは、金賞を取ることが出来ない。」と言いました。その言葉で私は気づくことが出来ました。それは、金賞を取れる演奏ができるのは、そこに携わってくれた人たち全員への感謝の気持ちが必要なのだということ。部訓として、毎日言っていた感謝の意味をそこで初めて理解しました。

それから私は高校生になりました。中学の部活で学んだことを習慣にし、感謝の心をいつも忘れないようにしています。そして今年のコンクールは、どんな時でも部員のことを考えて下さる先輩、同じ方向を向いて努力しあえる同級生、自分の指示に真剣に向き合ってくくれる後輩、生徒に寄り添い正解へのヒントをくれる先生、自分が少しでも楽になれるようサポートしてくれる親など、多くの人への感謝を演奏で恩返し出来るようにしようと練習に励みました。時には、どうしていいのかわからず悩み、ぶつかることもありましたが、頑張っているのは

い演奏をした全ての奏者と指揮者に会場にいる全員が拍手をしていました。そんなお互いを高め合えるような素敵な吹奏楽の世界に私も入ってみたいと思うようになりました。

そうして私も姉の背中を追うようにして、中学校に入學しすぐに吹奏楽部に入りました。そこでの毎日は、私にとって人生で一番の思い出になったとも言えます。私の通っていた中学校は、中国大会常連の学校でした。そのため、練習も厳しく、部員は全員同じ目標に向かって毎日真剣に楽器に向き合っていました。最初は、付いていけないかと少し不安でしたが、努力を惜しまない先輩を見ていくうちに、一日でも早く混ざれるよう自分も努力しようと思うようになりました。特にホルンを吹いている三年生の先輩は、周りへの声掛けや自分の苦手にしっかりと向き合える先輩の鑑のような人でした。私もそうなりたいと強く思いホルンを吹きたいと思うようになりました。そして、自分の担当する楽器について顧問の先生からお話があり、なりたいと願っていたホルンを吹くことが決まりました。そのことを家族に伝え、すぐに楽器店へ向かいホルンを購入しました。ホルンに映る自分の姿を見て、この子に向き合う演奏が出来るようになるうと思いい、それから毎日練習に励みました。

それからというもの、演奏面は勿論、生活面も自分に厳しくするよう心掛けました。コンクールでは、技術と表現の二つの観点で審査されます。技術は、日々の練習

自分一人ではないと思うと、頑張ることが出来ました。そうして迎えたコンクール。苦手だと思っていた箇所は、毎日の練習の成果もあり大成功することが出来ました。目標であった金賞には、あと少し届きませんでした。全体としてはベストの演奏が出来ました。客席からの温かい拍手は、自分の感謝に対する返事のように思えました。

そして今私は、部長をしています。まだまだミスの多い部長ではありますが、どんな時でも、感謝の気持ちを忘れず、愛情をもって音楽と向き合える人になろうと思っています。音楽は決して一人で創ることが出来ないということ。常に考えて、関わっている全ての人への感謝の気持ちを大切にできる部活にしていきたいです。